

# 市民社会をつくる就労支援

津 富 宏

NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡理事長

静岡県立大学国際関係学部教授

[tsutomi@u-shizuoka-ken.ac.jp](mailto:tsutomi@u-shizuoka-ken.ac.jp)



# 背景にある問い

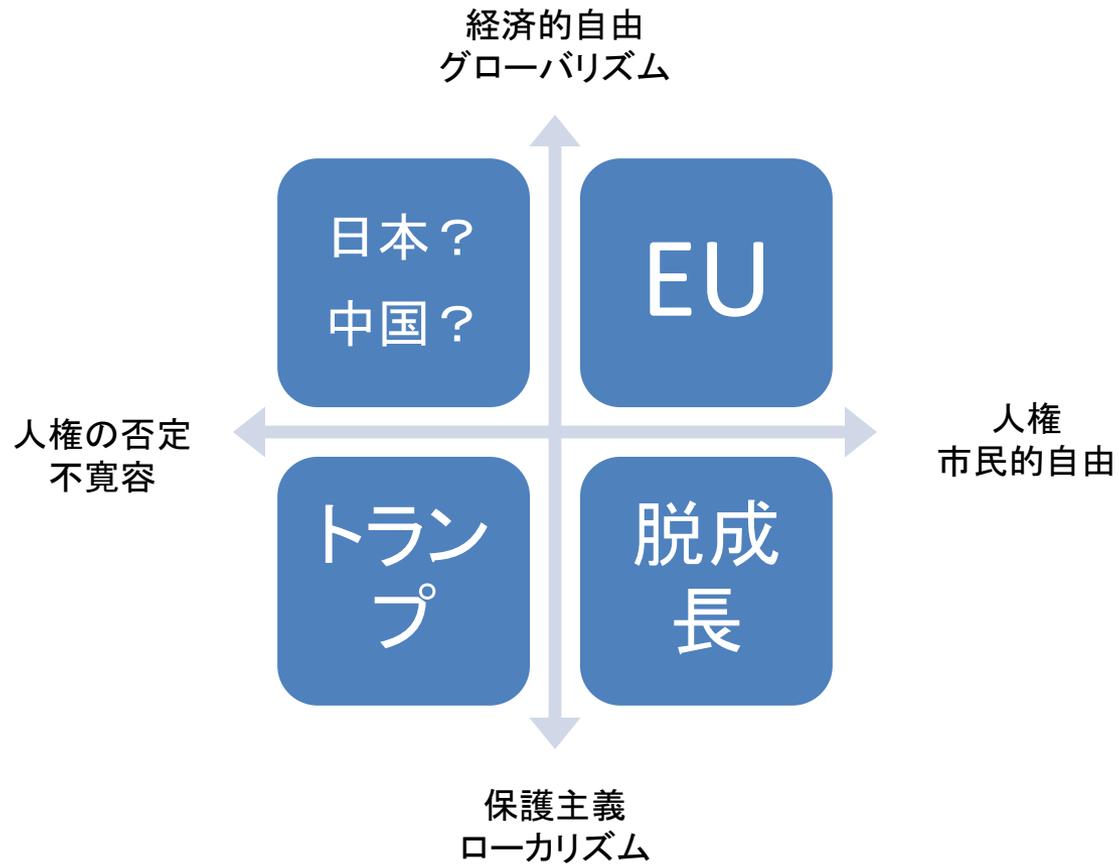
新自由主義下において  
市民社会は  
どのように形成されうる  
のか

# 近代の矛盾

新自由主義の進展による  
経済的自由と市民的自由の  
乖離

格差社会の拡大と結社の崩  
壊

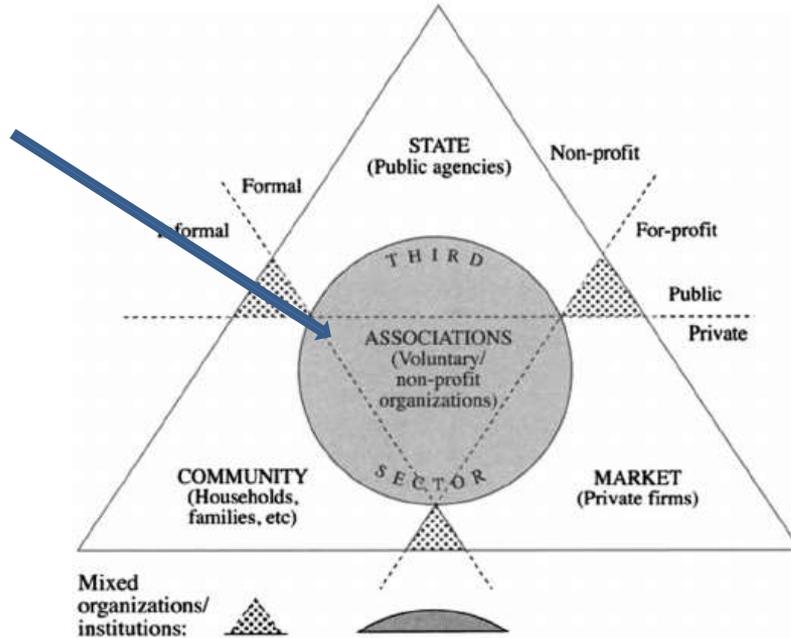
自由権 > 社会権



# ペストフの三角形(北欧的福祉国家論)

## 国家—再配分

北欧では  
協同組合が  
隙間を埋める  
という論



家政—互酬性

市場—交換

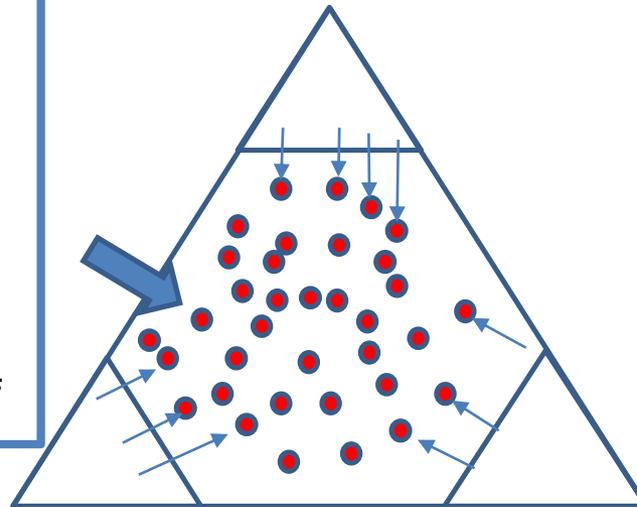
# 起きていること

国家—再配分

格差社会化の進行  
サービス提供からの  
行政の撤退

隙間における  
無縁化の進行

サービス提供を  
家族(地域)及び市場に期待



家族—互酬性

市場—交換

行政からの  
サービス提供者としての  
市民社会への期待の高まり

市民社会は  
単にこの期待に  
応えればよいのだろうか。

# 市民社会の四つの意義 (松原、2018)

サービス提供  
市民性の強化  
政策提言  
社会構築

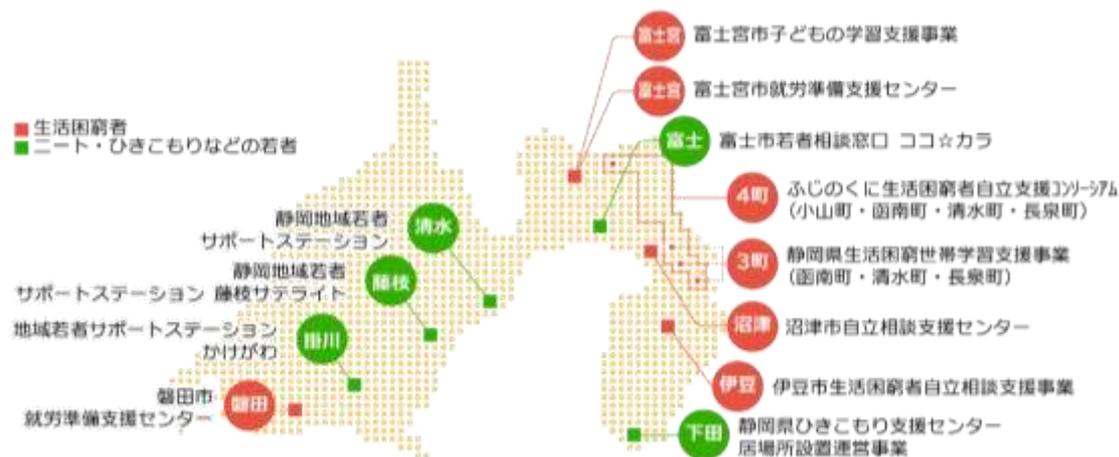
結社としての市民社会

# 静岡方式

- NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡が試行錯誤を繰り返しながら積み上げてきた、就労支援の方式
  - 平成14年 任意団体として発足
  - 平成15年 支援を開始
  - 平成16年 NPO法人化
- 市民ボランティアが行う
- ストレングス／リカバリー・モデルに立つ
- 精神障がい者の就労支援IPSが下敷き



	H28	H29
総対象者数(就労支援・学習支援・生活困窮者自立支援・ひとり親支援など)	1255人	1178人
うち 就労希望者数	869人	761人
うち 就労者数	551人	393人



県内に1,000人のボランティア(静岡県東部で活発)

# 青少年就労支援ネットワーク静岡

「人とのつながりで人は変わる」

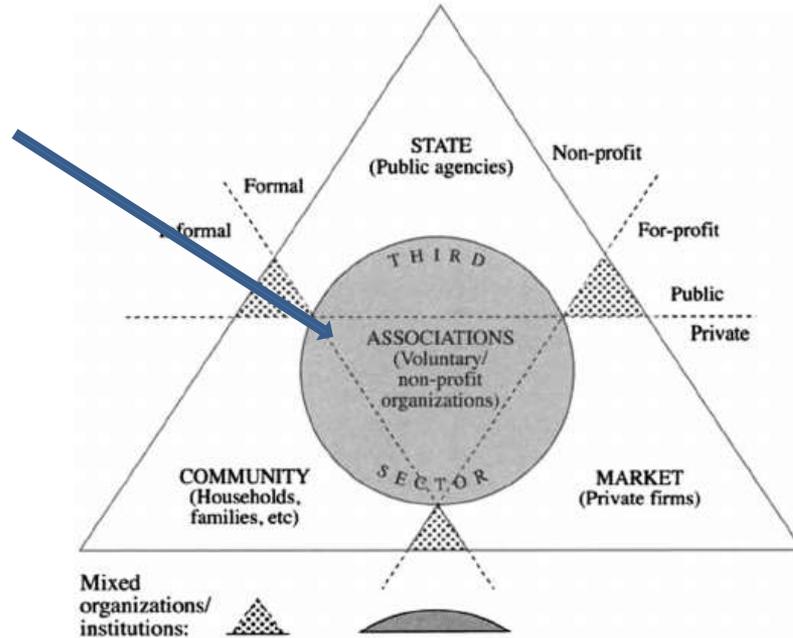
## ミッション

青少年就労支援ネットワーク静岡は、静岡県内の働きたいけれども働けない人びとに対して、市民のネットワークによる伴走型の就労支援を提供することを通じて、働く喜びを分かち合える、相互扶助の社会をつくることを目的とします。

# ペストフの三角形(北欧的福祉国家論)

## 国家—再配分

北欧では  
協同組合が  
隙間を埋める  
という論



家政—互酬性

市場—交換

# 行政にも市場にも抱えられない人々

- 「障がい者の支援の対象にならない＋求職活動を通じて一般雇用には吸収されるわけでもない」若者を対象とする
- 福祉： 障がいなどがあって「働けない」のなら、再配分によって行政が面倒を見る
- 就労： 「働ける」のなら、労働との交換を通じて企業が面倒をみる
- 家政： 働いていないことを、家族が問題視しないのなら（たとえば、家事手伝いのように）、家族が面倒を見る
- 若者の就労支援とは、三つの小さな三角形によって適切に対応できない問題の可視化としてスタート

# 行政の力で市場へと方向づける

- ワークフェア： 小さな福祉を志向する新自由主義の下で、「上の三角形」の力を用いて、隙間にいる人々を「右下の三角形」への方向付ける
- つまり、半福祉・半就労とは、もともとは「隙間」、つまりは、非福祉・非就労に位置づけられていた就労困難な若者たちを、行政が介入して、上の三角形と右下の三角形にまたがらせるかたちで、所在を確保していこうという取り組み

# 半福祉·半就勞

國家一再配分



家政—互酬性

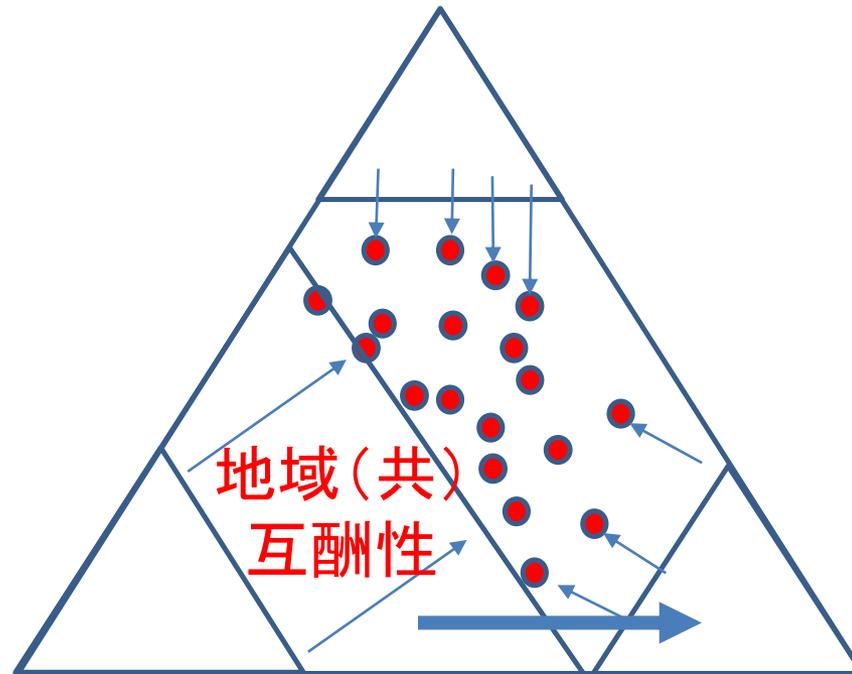
市場—交換

# 静岡方式

- 理念は、相互扶助(助け合い)であり、互酬の原理に立つ。
- 左下の三角形「私」を拡張して、「共」の領域を拡張する
- 隙間を制度で小さくしようとするのではなく、隙間を、互助の原理に則って、再組織化することで、隙間に陥った人々を生きやすくしようとする
- 隙間に陥った人々を支えるにあたって、制度ではなく、地域(コミュニティ)を用いる

# 静岡方式(脱福祉・脱就労)

国家(官)一再配分



家族(私)一互酬性

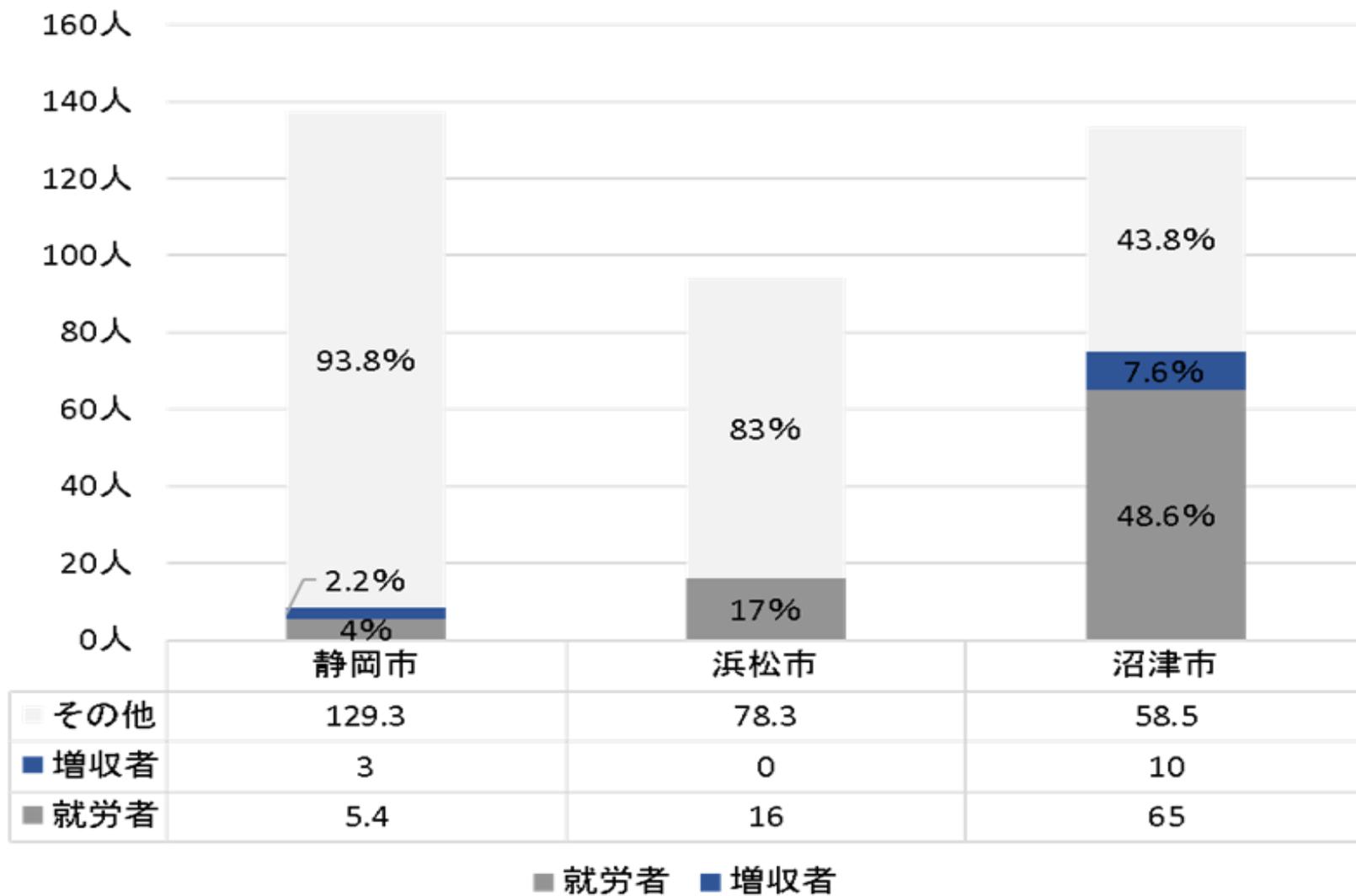
市場(民)一交換

# 静岡方式では、なぜ、就労か

- 人間は、社会的存在であり、自らの価値を、他者からの評価によって、相互に承認し合う。自らの誇りは、他者による適切な承認を通じて、つまり、ネットワークを通じて調達される。
- 私たちの多くにとって、「働く」ということが、自尊心の最大の調達源
- 静岡方式は、この社会的現実を前提に、就労を通じた誇りの相互承認のネットワークを地域に作り出す
- なお、何をもって「誇り」とするかは、個人によって異なる。よって、「就労」、とりわけ、「雇用されること」が、その人にとって最も重要ではない。
- 就労の能力は均等に分配されていない。一人ひとりが自分なりに精一杯働いたという「誇り」を手にする社会を目指す。
- 働きたいという気持ちの実現を応援する、権利保障としての就労支援
- 労働を商品化して社会に価値をもたらすためのものではなく、自らの誇りを手にする権利を手にするための運動

# 静岡方式による 生活困窮者の就労支援

- 静岡方式は、若者の就労支援として始まったが、7年ほど前から対象を広げ、就労支援の根幹にある「貧困」に焦点を当てて活動を行うようになった。
- 生活に困窮していても、まずは、就労支援から入る。
- 就労できれば解ける問題は多い。金銭が手に入ることで、住居、食べ物、友人関係など、様々なものが手に入る。住居、食べ物、友人関係といった外堀を埋めるより先に、本丸を落としてしまう
- 静岡方式の特徴は、その「速度」である。
- place and train(仕事に就いてから、就労能力を伸ばす)モデルであって、train and place(就労能力を付けてから、職場に導入する)モデルではない
- 相談があって数日以内には、知己を頼って仕事を見つける。
- この職場に定着しなければいけないわけではない。「試行錯誤」を重視し、次の転職、そして、その次の転職を通じて、就労適応を改善していけばよいと考える。



# H28年度実績

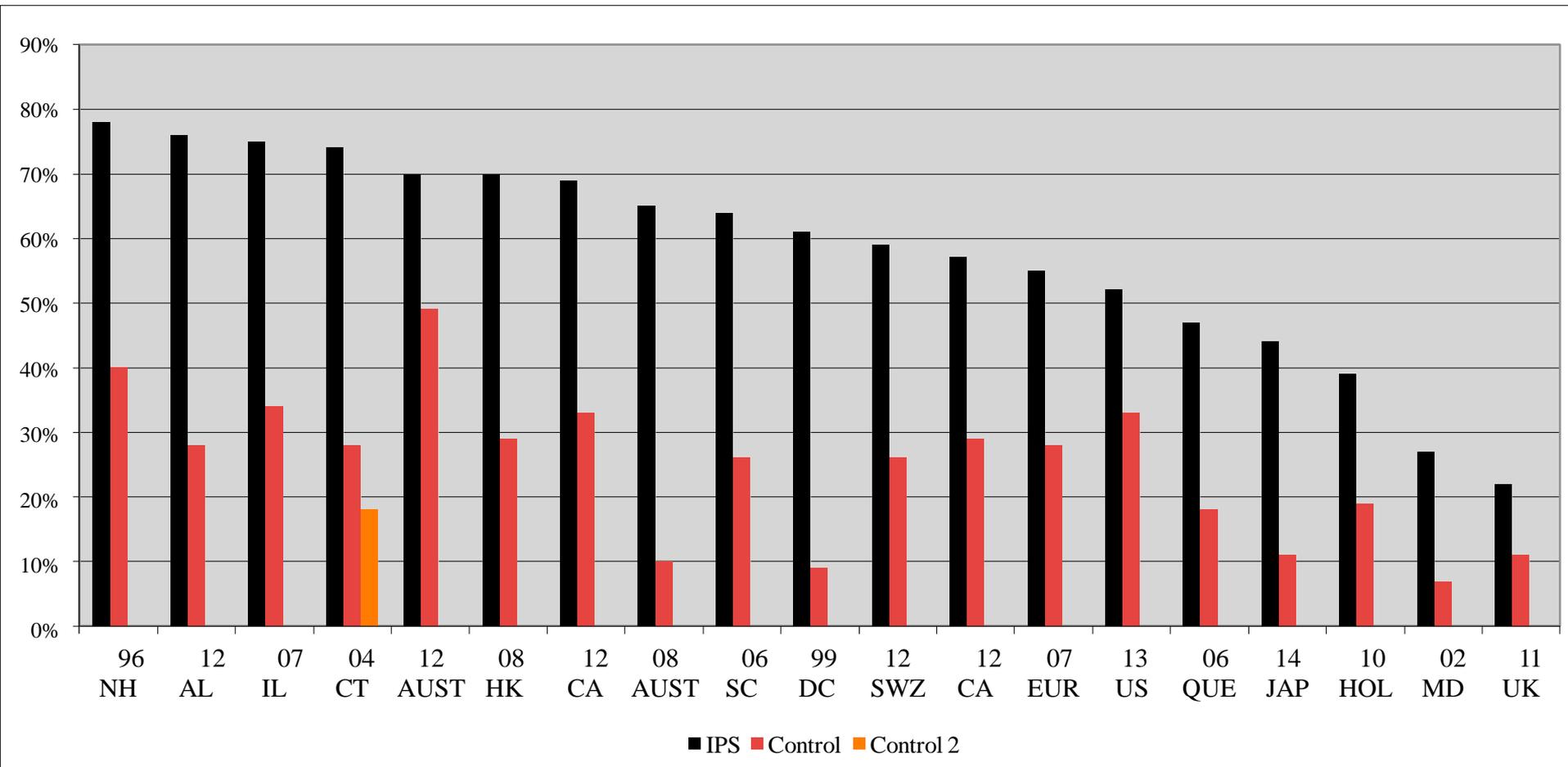
# 「反」福祉？

- 「人を絶対に福祉依存にしない」という信念。
- 静岡方式は、問題ではなく強みに注目する。
- 一方、福祉は、強みではなく問題に注目する。
- 人の可能性を信じることの重要性。
- 「働ける」ことを前提とするIPSは、従来型の就労支援と比べて、ほぼ2倍の就労率を示す。つまり、いわゆる「福祉的アプローチ」は、本人のポテンシャルを「半減」させている。
- ただし、静岡方式が、福祉的援助を直ちに排除するわけではない。
- 就労のための福祉的支援： 就労するためには、様々な支援が複合的に行われる必要がある。当座の生活費の確保、借金の整理、家賃の未払い、ひとまずの食べるものの入手、就労先の決定に伴う住居の確保、通勤手段の確保など。
- ただし、静岡方式では、これらの支援を福祉的支援と考えているわけではなく、むしろ、就労支援であると考える。
- 就労を補完するものとしての福祉的支援： 働くことによって生活に必要な収入がすべて得られるわけではない。足りない分の収入は何らかの形で補う。

# IPSの効果

## 働けるという前提を持つことの価値

就労率



# 「反」就労？

- ハローワークを代表とする、雇用行政に位置づく、従来型の就労支援の否定が  
出発点
- over the counterの「相談」を否定
- 一人では動けない若者の就労支援
- 伴走支援： 本人が主人公
- 「好きなこと・好きなもの・好きな人」に導かれる
- 「就職」という点を通過させる支援ではなく、「就労」という線に沿った継続的な支  
援
- 求人情報とのマッチングに過ぎず、フォローを行わない「職業紹介」は、就労支援  
ではない
- キャリアカウンセリングもまた、就労支援ではない。
- 本人をアセスメント(査定)する専門家の立場には立たない。
- 本人を顧客／消費者にしない
- ただし、静岡方式が、他の形態の就労支援を排除するわけではない。
- たとえば、ハローワーク不要論を唱えたりはしない。
- ハローワーク経由で提供される職業訓練につなぎなおすことはしばしば有用
- この社会で提供されている応援の仕組みが使えるように伴走する

# 静岡方式の原則

1. 働けると信じる
2. 伴走する
3. 人生に付き合う
4. 地域を再組織化する
5. ごちゃ混ぜの場をつくる
6. 支援の生態系をつくる
7. 地域を自己増殖的に埋め尽くす

# 1 働けると信じる

- 本人が自分自身を信じるできないとき、本人の周囲にいる私たちが、まず、本人を信じる。
- 関わる側の思いが、自己成就的に実現すると信じる
- 構築主義的な発想
- 人びとが必ず働ける社会をつくりたいと考えており、そのためにも、この信念は重要。
- これは、上述した、精神障がい者の支援手法であるIPSとも合致
- IPSが、精神障害を持つ人々に対する従来型の就労支援と比較して、約2倍の就労率を示しているように、この信念は単なる信念ではなく、実証的な根拠がある
- 従来型の福祉アセスメントが、本人の「問題」を発見し「解決」というスタイルを取りがちで、その結果、働けない理由探しになりがちであるのとは好対照
- 「働けると信じる」という原則は、本人の可能性を引き出す、もっとも強力な原則
- 「好きなこと、好きなもの、好きな人」

# 1 働けると信じる (IPS)

1. 競争的雇用が焦点が当てられている： 重い精神障がいをもつ人たちは目標を一般雇用において、それを達成することができると思う。
2. 仕事探しをいつ始めるのかはクライアントの選択に基づいている： 働く準備ができているかどうかの評価・診断・症状・不法薬物の使用歴・精神科病院への入院歴・障がいの程度または刑事罰を受けた過去などによって、働くことを望む人々を排除しない
3. リハビリテーションと精神保健サービスの統合： IPSプログラムは精神保健治療チームと統合されている
4. クライアントの好みを尊重する： サービス提供はプロバイダーの判断よりむしろクライアントの好みと選択に基づいている。
5. 個別の経済的カウンセリング： 雇用仕事スペシャリストは、クライアントのために社会保障、医療扶助他の公的援助に関する個人用にカスタマイズされ、分かりやすく、かつ正確な情報を得るのを援助する
6. 迅速な職探し： IPSプログラムでは就職のためのアプローチとして、長期にわたる職業前評価や訓練・カウンセリングを行うよりもむしろ、クライアントが直接仕事を得るのを助けるために迅速な職探しをするアプローチを用いる
7. 系統的な職場開拓： 雇用スペシャリストは、計画的に地元の雇用者と接触を持つことによって、クライアントの興味に基づく雇用者ネットワークを構築する
8. 無期限の個別支援： クライアントが望み、必要とする限り、フォローアップ支援は個別に判断されて継続される

## 2 伴走する

- 働きたくても働けない人々の多くは、働き始めること、そして、働き続けることが自体が不安
- そのハードルを感じるがゆえに、自分から雇用につながっていくことが難しい
- 企業などの雇用主や興味のある活動につなぐために、伴走する
- 「あなたは、一人で動かなくていい」と行動で伝えることで、一人では動けない人も背中を押される
- 伴走の過程で、本人とたくさん話をし、「好きなこと、好きなもの、好きな人」について教えてもらう
- 伴走しながら、企業やたくさん地域の人々と出会い、仲間になってもらう。
- 単なる就労先の紹介ではなく、人と出会うための支援
- 地域の人々の網の目に、本人をつなぎ溶け込ませていく
- 地域のたくさんの「いい人」と出会っていくための活動

## 2 伴走する



## 2 伴走する

神奈川県に住む70代の会社の社長さんでもあります🌸諦めないボランティアさんのお一人です♡ 一度会いに行った時に(^^)

、、、なんかあって大変だったらさ、うちに来なよ(^^) 別に人生長いんだし僕も昔家出してからここに居ずいちゃったんだ。気づいたら社長してた(^^)好きな仕事だなあって感じたんだよな～始め嫌だったけど△

このお話がきっかけになり、まだ10代ですが、優しくって真面目な髪の毛セットが得意な若者くんが向かいました🌸(^^)

あれから1ヶ月です♡ ボランティアさんは最初に知り合いのお店に2人だけで伴走♡♡(^^) 2軒目でホテルマンやフロント等も目指せるように、周りのスタッフさんたちにも紹介をしてくれました。

毎日毎日早起き6時半ですがお迎え車もあり(^^)です。歯磨きしながらだって乗り込めます🌸(^^) 周りの方より2時間短い時間からスタートされました。

助けの言葉や行動があるとがんばれちゃいます♡(^^)♡

# 3 人生に付き合う

- 「若者としての年齢」の上限を切って支援を打ち切ったりすることは不適切
- いったん就労したとしても、働き続けることは困難
- 就職ではなく、働き続けること、あるいは、いったん仕事をやめても次の仕事にチャレンジできることが大事
- 「試行錯誤の支援」
- 各地域におけるフォローアップ・ミーティング
- (たとえば)1か月に一度、地域ごとに(通常、市町村単位)、支援をする側とされる側が一緒に集まり、近況を交換し、さらに、必要に応じて伴走につなげる
- 支援者や被支援者という「立場」、あるいは、支援者－被支援者という関係は、長期的にみると固定していない
- フォローアップ・ミーティングは単なる継続支援ではなく、地域の相互扶助の関係を紡ぎだす場
- 私たちは、この不安定な世の中を生きる同志

# 3 人生に付き合う

## 県内各地でフォローアップミーティング



# 就労支援の原則

1. 働けると信じる
2. 伴走する
3. 人生に付き合う
4. 地域を再組織化する
5. ごちゃ混ぜの場をつくる
6. 支援の生態系をつくる
7. 地域を自己増殖的に埋め尽くす

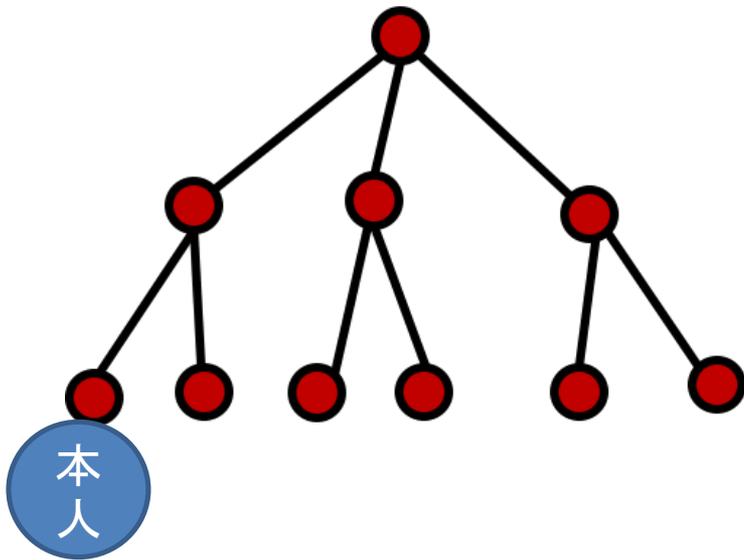
# なぜ、静岡方式が地域に向かったか

- 静岡方式は「伴走型支援」という語に見られるように、当初は、個人を対象としていた。
- 「半福祉・半就労」という視点も、被支援者個人単位の視点であるように思われる
- 静岡方式は、個人を対象とする発想から、地域を対象とする発想へと変化
- 困っている人々ほど自ら動くことが困難で、相談に赴く余裕がない。地域に浸透し、民生委員や自治会など地域のつながりを通じて、困っている人と出会っていく
- 就労困難は、住まいがない、適切な交通手段がない、子どもを預けるところがない、話し相手がいないといった、地域に散在し地域で解決できる困りごとの一部
- 企業を同じ地域を担う仲間、顔の見える誰かとして出会う
- 問題が量的に大きい。個別支援という発想で支援しても追いつかない。
- 不可視化されている困りごとを中心にした「地域づくり」をする。格差を広げるような地域活性化ではなく、すべての人々を経済的に包摂する地域をつくる
- 地域というプラットフォームの上で、すべての人々を困りごとを抱えた存在として捉え、相互扶助の関係でつなぎ直す
- 「共(地域)」による就労支援へ

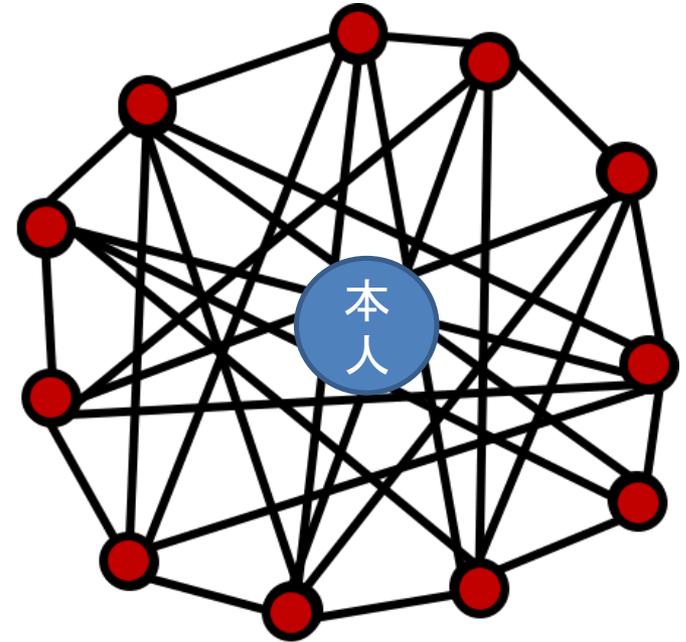
# 4. 地域を再組織化する

- 「ピラミッドからネットワークへ」
- ピラミッド型の組織である行政(たとえば、福祉)から見ると、地域は、その末端
- 困りごとを抱えた人々は様々な困りごとを一体として抱えているが、いずれかのサービスの末端につながらざるを得ない。
- サービス提供型の企業との関係においても同様
- 被支援者ないし顧客になってしまう
- 本人をピラミッドの末端に位置づけるのではなく、本人を取り巻くネットワークをつくる
- 困っている人がいたら、本人と同じ地域に住み、様々な強みを持っている人々が、本人を取り巻く
- このネットワークづくりが地域の再組織化
- 地域の人々のつながり方を変えることで、地域の仲間として、本人をめぐって助け合える関係をつくっていく

## 4. 地域を再組織化する



ピラミッドから



ネットワークへ

地域を編み直す

# 5. ごちゃ混ぜの場をつくる

- 支援—被支援の関係を乗り越えた、創発的な解決が生み出される地域をつくる
- ネットワークでは、多様なコミュニケーションチャンネルを通じて、創発的な伴走のアイデアが生み出されることが、「構造」として意図されている。
- ネットワークにおいて重要なのは、さまざまな立場・属性の人々が交流すること
- 困りごとを抱えた人々も、地域の困りごとに関心がある地域の人びとも、本業としては困りごと解決を仕事とする人々などが、地域を担う市民として出会い、相互扶助を立ち上げる
- 例 OSTというファシリテーションの手法を用いて、困りごとについて話し合い、解決に向けてのアクションを立ち上げる場を開く
- 参考にしているのは、南方熊楠の尊重した概念である「萃点(すいてん)」
- 鶴見和子(2001)によれば、「萃点は中心ではないの。そこですべての人々が出会う出会いの場、交差点みたいなものなのね。そして非常に異なるものがお互いにそこで交流することによって、あるいはぶつかることによって影響を与えあう場—それが萃点なの」

# 南方熊楠の「萃点」

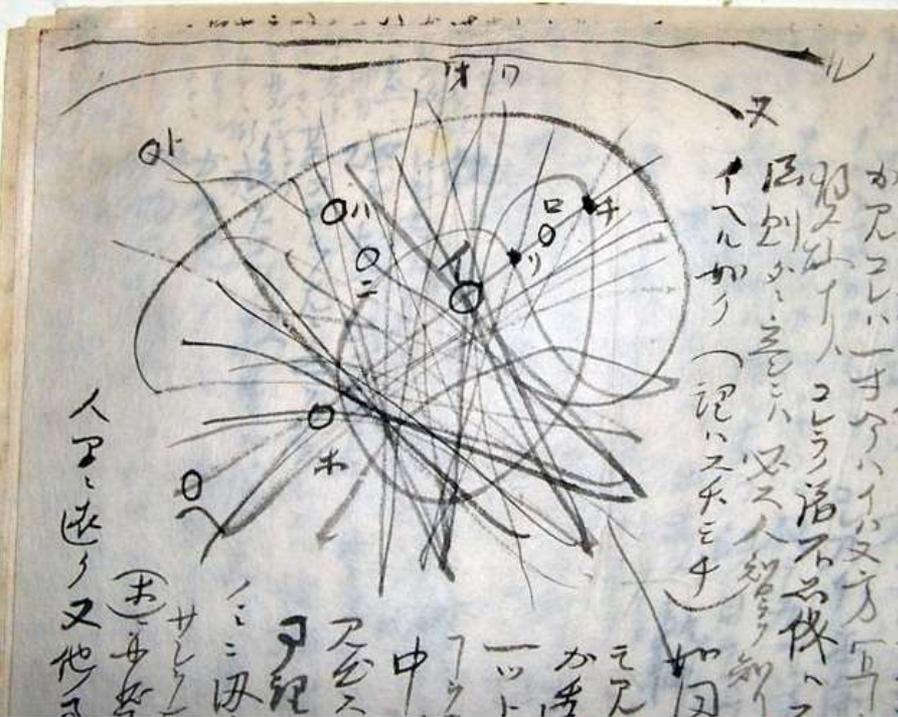


写真: 土宜法竜宛書簡(南方マンダラ)

明治36年7月18日付の一部

(参照: 平凡社版全集第7巻365頁)

## サポめま

市民の力が  
地域を変える

子ども食堂  
学習支援  
居場所  
就労支援

NUMAZU VOLUNTEER SUPPORTERS

**【活動方式】**  
「活動方式」は地域づくり  
「楽しく」また「有意義」になるには  
この活動で「楽しく」また「有意義」になるには  
「楽しく」また「有意義」になるには  
「楽しく」また「有意義」になるには

**2017.8.27(日)** 開場 18:15  
閉場 18:45  
サポめまの活動内容や活動の意義について  
入場無料 | 誰でも参加可能 | 無料駐車場あり

場所: 市民の力 市民の力 市民の力  
お問い合わせ: 事務局 事務局 事務局

豊かな地域と未来を創る

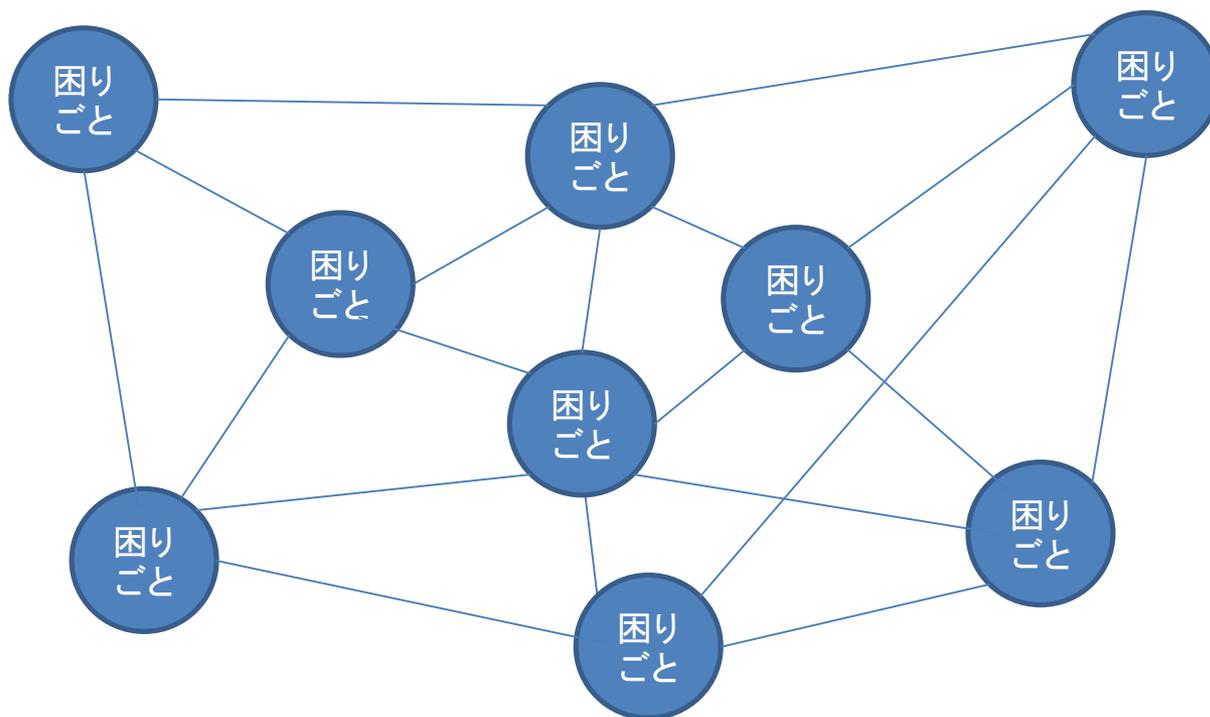
サポめま  
事務局 事務局 事務局  
TEL: 090-2689-2555 (受付: 9:00-18:00)  
E-MAIL: saponuma@gmail.com  
WEB: https://saponuma.wordpress.com/



# 6. 支援の生態系をつくる

- 市民一人ひとり、私たちの生きにくさとつながる、相互に関連し合う、さまざまな困りごとに関心をもっている。
- 子どもの食に関心を持つ人もいる。子どもの学習に関心を持つ人もいる。ひとり親の問題に関心を持つ人もいれば、LGBTの当事者もいる。
- その中に、就労支援に関心を持つ人や、雇用そのものに関心を持つ人がいる。
- 様々な関心を持つ人々を一つに取りまとめるのではなく、それぞれの支援が実現できるように応援しあい、それぞれが独立に活動しながら、相互に重なり合う状況をつくることを目指す。
- 支援がこのように連鎖したシステムを、私たちは「支援の生態系」と呼ぶ
- 支援の生態系で地域を覆いつくすことを目指す

## 6. 支援の生態系をつくる



困りごととの連関

# 6. 支援の生態系をつくる

子ども食堂



伴走支援

学習支援



就労支援



母子家庭の  
夏休み支援

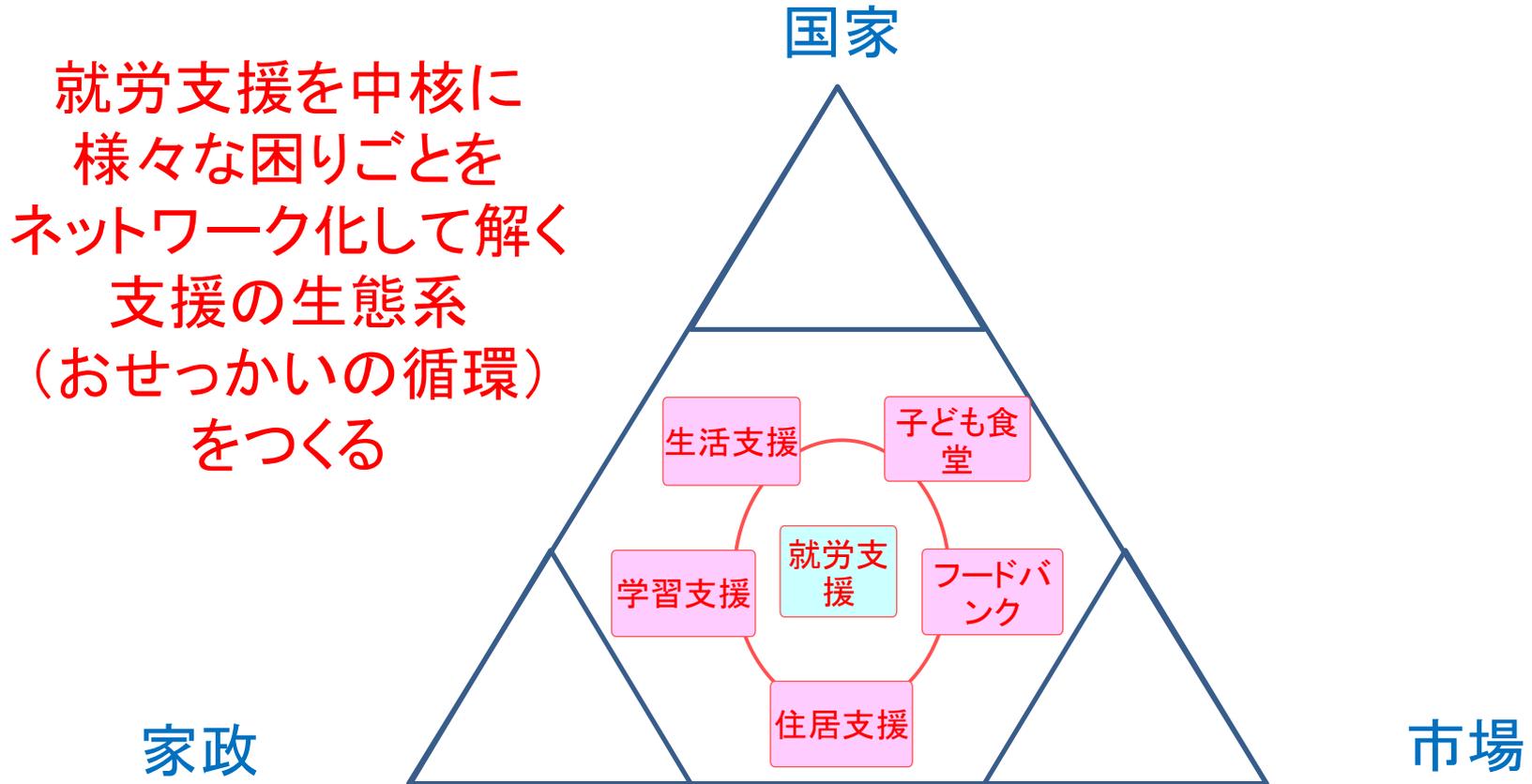


引越し手伝い



お話会  
自助グループ

# 6. 支援の生態系をつくる

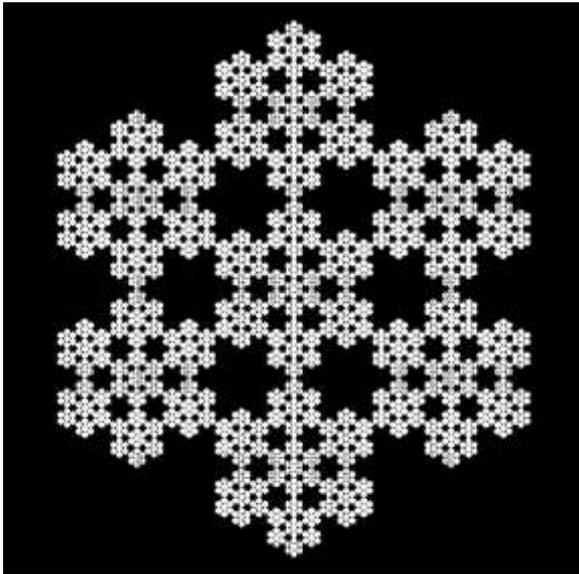


ボランティアの力で地域のセイフティネットを作る

# 7. 地域を自己増殖的に埋め尽くす

- 私たちが自己像として持つのは、フラクタル図形
- 同型でありつつ、入れ子構造に増殖していく
- 地域を覆っていくにあたって、同型かつフラットな構造を保ちながら成長(細胞分裂)していくのを表現するのに適している
- 静岡県の中部(静岡市、藤枝市など)で発足し、ボランティアを増やしながら、静岡県全県に広がり、人数が増えるにつれて、より小さな範囲(通常、市町村単位)のチームを増やしてきた。
- 生きものをイメージするのに適している。
- 指揮命令系統に則ったメカニカルな「ピラミッド」ではなく、自己増殖していくオーガニックな「ネットワーク」
- 生きものとしての自己イメージをもつことで、停滞せず成長していくという感覚を持つ
- 参考) オランダの、ビュートゾルフという訪問看護師の組織

# 7 地域を自己増殖的に埋め尽くす



フラクタル構造

# 7 地域を自己増殖的に埋め尽くす



## 東部の場合

- ①沼津のセンターでのFMから出発
- ②沿線ごとにエリアを分ける
- ③さらに10人ぐらいの集まりができればさらに市ごと
- ④市の中でも細分化

一人ひとりの顔が見え  
話が聞ける程度の集まりを各地で増やす

# 7 地域を自己増殖的に埋め尽くす

## Buurtzorg

オランダの訪問看護師の3分の2(9000人)が働く  
10人から12人のチームで、リーダーはいない  
本部はたった28人



さいごに

# コモニング(連帯づくり)としての 就労支援

- コモニング(commoning) (Linebaugh, 2009) : コモンズに依る生き方を指す
- Ristau (2011)
- 「コモニングという行為は、お互いが助け合うという期待のもとで、何かが私たちみんなに属している(これが、コモンズの本質)という共通の理解をもって、かたちづけられている関係性のネットワークによって成り立っている。コモニングの実践は、「自分のことは自分で」という広く共有されている倫理から、「私たちはともにここにある」という倫理への思考の変遷を示している」
- 「この動きの中心には、自らが見たい世界を共に創造し生み出すために集まった人々がいる。私たちは自らの問題を解くために必要な作業を誰かがやってくれるのを待っている必要はない。より多くの人々が自分の住んでいる地域を見渡しては・・・「みんなで力を合わせれば、地元のこの問題は解決できると思う」と言い始める。」
- 「コモニングは、一般市民が、自分たちのコミュニティの未来をかたちづくるために、自ら決定し行動する新しい方法を示している。利益重視の市場原理に閉じ込められてしまったり、政府機関の資金に完全に従属してしまうこともない」
- 「コモニングは、市場経済において売り買いされるものだけが、私たちの暮らしに根本的な意味を与え生存を可能にする唯一の方法であると主張してくる、近代の暮らしを支配するパラダイムに対抗する一つの方法である」
- 「私たちが・・・社会的・経済的な暮らしをまじりあいながら組織化していくためのより本質的な方法を発見する際、私たちはコモニングというもっとも古い在りかたの一つに関与している」

# コモニング(連帯づくり)としての 就労支援

- 静岡方式は、相互扶助の市民社会というコモンズ(共の世界)を、私たちの地域が有していた、共同体のイメージを喚起しつつ、再創造する取り組み
- ペストフの三角形で言えば、左下の三角形を支える互酬性原理によって真ん中の領域を再組織化する試み
- 支援／被支援者モデルや提供者／顧客モデルによって、真ん中の隙間を埋めるのではなく、公共的空間として、私たちの地域社会を再構築する
- 顧客化や労働者化を超えた社会関係の再構築を目指す
- つまり、私たちが目指しているのは、半福祉・半就労というより、脱福祉・脱就労による市民社会づくり
- 市場化の持つ排除の力を乗り越え、市民主体の地域をつくる
- 顧客化を推進する福祉でもなく、労働者化を進める民間企業でもなく、相互扶助の地域社会自体が担い手となる

# 相互扶助社会の形成

- 福祉(官)にも企業(民)にも頼らない、相互扶助(共)の社会づくりを目指す
- 福祉自体の市場化が進む現在、広く言えば、脱市場化の運動
- 貨幣は誰もが手に入れられるわけではない。人の弱さを前提とし、貨幣に基づく交換(民)ではなく、互酬(相互贈与)(共)で生きられる社会をつくることを目指す。
- 他者への依存関係から独立するという意味での就労「自立」概念を否定
- 就労は、個々人の自立のための手段ではなく、地域における相互扶助のネットワークに入り、支え合いの関係に入ることを意味する。「相互扶助のための就労、相互扶助による就労」
- 「コミュニティ・オーガナイザー」(地域のまとめ役、促し役、支え役)が重要
- 何かのイシューについての勝利を目指すようなものではなく、ピラミッド型ではなくネットワーク型に、地域社会の再組織化を目指す
- 相互扶助の関係を深化・展開していくための、萃点(ごちゃまぜの場)の形成、さまざまな支援が織りなす生態系の構築、フラクタル的に地域を覆いつくす自己増殖の促進が専門性となる
- 相互扶助の社会関係の再構築にとどまらず、相互扶助的な経済関係の再構築をも目指す
- 支援の生態系を基盤に、社会的連帯経済という経済の生態系(たとえば、資金循環や企業間連携)を作り出していくことは、私たちの次の道標となる。